校長通信『道標（みちしるべ）』　第24号
令和３年１２月２１日
福岡県立若松商業高等学校　校長　谷川 陽一

二十四節気：１２月２２日（水）冬至（とうじ）

冬至は、地平線から太陽が最も低い位置にあり、昼が最も短い日です。中国では一陽来復（いちようらいふく）と言われ、冬至に最も弱った太陽が回復する日として、一年の始まりと考えられました。西洋の国々にも「太陽の誕生日」として祝う風習が多く見られます。また、江戸時代から冬至に柚子湯（ゆずゆ）のお風呂に入ることや、「かぼちゃ」を食べる習慣があります。これは、寒い冬を乗り越えるために、身体を温め野菜不足になりやすい冬に栄養をつける先人の知恵です。

令和３年度　第２学期の終業式に当たって　　－ 原点に目を凝らす －

２学期は新型コロナウイルス感染症防止対策を徹底しながら**「学びの確保」「学びを止めない」**ことを最優先に教育活動を実施できました。生徒の皆さんの努力と先生方の適切な指導により、大過（たいか：おおきな事故等）なく終業式を迎えられたことに感謝します。また、授業はもちろん、若商祭・クラスマッチ・芸術鑑賞などの学校行事を体験することで、コミュニケーション能力や社会性・公共性を高め、本物に触れる体験をとおして、生徒の皆さんの「心の成長」に繋がったことと思います。そして、高校生活の大切な１ページとして、共に感動を共有したクラスの仲間たちとの思い出は、生涯をとおして色褪せることがない若き日の素晴らしい瞬間を心に刻まれたと思います。これらの体験は、皆さんの人生でお金では買えない、かけがえのない素晴らしい財産と必ずなります。

さて、年末年始を迎えるに当たり、物事の本質を見つめるため、我が国の文化について考えてみましょう。大晦日と言えば「除夜の鐘」を思いつきますね。多くのお寺で 108 回撞（つ）かれます。わが国以外では、お隣の韓国でも行われています。　この習慣は中国から伝わり、鎌倉時代まで禅寺（*ぜんでら）では毎日撞かれ、やがて大晦日に欠かせない行事となったとのことです。

*坐禅（ざぜん）によって仏道をきわめようとする仏教の宗派（しゅうは）

仏教では、人間には心に 108 の煩悩（ぼんのう：自分自身を苦しめる心）があるとされています。お金や権力・美しさなどを手に入れても心が満たされるわけではなく、幸せは自分の心の中にあると考えられています。自分自身を苦しめる 108 ある煩悩を大晦日に鐘を撞くにより打ち消し、来年は幸せに過ごすことを願うものです。

物事の淵源（えんげん：物事が成り立っている基)やその意味を探ることで、季節の行事や日常の文化がいきいきとしたものに感じることができます。これは季節の行事や文化だけではありません。世の中のすべての活動には必ず由来や理由があるのです。その源流を探れば自（おの）ずと、なぜこのようになっているのか納得できます。納得すれば主体的（自分の意志・判断に基づいて行動すること）に取り組むことができます。このことは、学習や部活動はもちろん、社会人となって仕事をする際にも必ずよい効果が表れます。近い将来、社会で主体的に活躍するために、先輩たちが繋（つな）いできた歴史をひも解き、事跡（じせき：前任者が残した記録等）などを頼りに、**原点に目を凝（こ）らし「本質を見つける力」**をつけてほしいと思います。

最後に年末年始は様々な行事があります。文化や歴史を尊（とうと）び、「物事の本質を見つける力」と豊かな心を養い、充実した高校生活と心豊かな人生を送ってほしいと心から願います。

第２学期　終業式　校長式辞から